

## XVII International Botanical Congress (第17回国際植物学会)に参加して

唐原 一郎

富山大学理学部生物学科

新世紀に入って初めてとなる国際植物学会が、2005年7月17日から7月23日までの1週間、オーストリア・ウィーンで開催されました。この国際学会は6年に一度開催されるもので、ウィーンでは1905年の大会以降100年ぶりの開催です。マクロからミクロまで数多くの発表が行われ、今回も4000人以上が参加する大きな大会となりました。前回行われた時はハプスブルグ家ゆかりのシェーンブルン宮殿で行われたそうですが、今回の会場は、近未来的ともいえる面白い形をした巨大な建物である Austria Center Vienna で、無数の魅力的な歴史的名所が集中するダウンタウンからも地下鉄で10分くらいのところにあり、色々な意味で便利でした。会場の隣にはIAEAなどの国連機関の建物があり、あるとき入口を間違っただけで入ってしまい、物々しい警備に驚きました。オープニングセレモニーでは、ウィーン大学の弦楽8重奏オーケストラの生演奏をまじえながら、前回と今回の大会長の挨拶があり、私たち科学者は、植物のハビタッ

トの急速な減少という危機的状況を世の中にきちんと伝える必要があること、また植物学の長期的な研究を支える特別な funding の必要性を各国で訴えていく必要があること、などのアピールが行われました。

期間中を通じて、様々な分野においてジェネラルレクチャー、シンポジウムおよびポスターセッションが行われました。シンポジウムは同時に10以上ものセッションが進行したため、参加したいシンポジウムが重なってしまうことがあるのは残念でしたが、逆に言うと、そのため個々のシンポジウムセッションはこじんまりとしたものも多く、大会規模の割には参加者の顔が見えてアットホームな雰囲気を醸し出していました。分野は実に多岐にわたっており、根に関して言うと、例えば、組織パターン形成 (Duke 大・Vernoux 博士ら) や篩管 (ヘルシンキ大・Carlsbecker 博士ら) など分化に関わる転写因子の次のターゲットを探るため、転写因子の遺伝



オープニングセレモニー

2005年8月25日受付

\*連絡先 〒930-8555 富山市五福3190 富山大学理学部生物学科  
Fax: 076-445-6549 E-mail: karahara@sci.toyama-u.ac.jp

筆者の本学会への参加は、富山大学国際交流活性化推進事業、および(財)日本宇宙フォーラムが推進している「宇宙環境利用に関する地上研究公募」プロジェクトの一環として行われたものです。

子に GFP をつないで発現させる条件に根をおき、それらを発現した細胞としていない細胞をフローサイトメトリーで分けてマイクロレイ解析を行う、などという非常にテクニカルな研究などから、何メートルもある根系丸ごとの乾燥標本の実物を提示されるというユニークなプレゼンテーションで会場を沸かせた Kutschera-Mitter 博士ら（オーストリア・Pflanzensoziologisches Institut）の研究などまで、多岐にわたっており、興味深いものでした。また重力との関連では、pin 変異体を使った Palme 博士（フライブルク大）らの発表も印象的でした。当研究会の会員で千葉科学大学に最近移られた本間知夫さんも学会に参加されていて、会場でお会いしました。

当研究会で学術賞を受賞された Lux 博士（コメニウス大）のいらっしゃるプラチスラバは、ウィーンから特急列車で1時間ほどなので、これは訪れない手はない！ということで、やはり根の形態学で有名なニューヨーク州立大の Seago 博士が訪問されるのに便乗して一緒に訪ね、ドナウ川沿いの水生植物を訪ねる私的エクスカージョンに連れて行っていただきました。

さらに帰りの快適な特急列車の中では、Seago 博士が現在執筆されている最中の、根の aerenchyma 形成についてのレビューの原稿を見せていただきながら、個人的レクチャーを受けるなど、大変充実したエクスカージョンとなりました。

学会の話に戻りますが、一つ残念だったのは、ポスターセッションの時間が短く早朝やランチタイムと重なる不便な時間に設定されており、私と一緒に参加した学生の玉置君はやや不完全燃焼だと漏らしていました。ただシンポジウムを重視すればこのような形にならざるを得ないのかもしれませんが。一般的に学会は巨大になるほど個々の発表の存在感は薄まり疎外感を味わいがちかもしれませんが、この学会については、今を時めく研究だけでなく、古い歴史を持つ学会であるがゆえのオールドスクールな雰囲気もあり、歴史的に著名な先輩方に直接会って勉強できるというのが大きな魅力だと感じました。次の開催は2011年のメルボルンですが、急速な進歩を続ける植物学の姿はどのように変わっているのでしょうか、楽しみです。



ドナウ川沿いの森にて  
左が筆者、真中がLux博士、右がSeago博士。